

8) 非腫瘍性卵巣茎捻転の2例

鈴木 律子・大沢 義弘 (太田西ノ内病院)
近藤 公男 (小児外科)

非腫瘍性卵巣茎捻転の2例を経験したので報告する。症例は12歳と8歳で、ともに下腹部痛で発症し、エコー、CTにてダグラス窩に腫瘤を認めたため手術を施行した。手術所見は、いずれも著明な血行障害を伴う右卵巣卵管茎捻転であった。卵巣卵管の温存は不可能で摘出した。摘出卵巣の組織学的所見は出血性壊死で、腫瘍性病変は認めなかった。

小児における非腫瘍性卵巣茎捻転は稀であるとおもわれ、その特徴、原因を中心に考察する。

9) 当科における胆道閉鎖症の治療経験

高野 邦夫・中込 博
腰塚 浩三・武藤 俊治
西尾 徹・渡辺 一晃
三宅 知雄・毛利 成昭 (山梨医科大学)
桜井 裕幸・荒井 洋志 (第二外科)
大矢 知昇・多田 祐輔
大沢 義弘 (太田西ノ内病院)
(小児外科)

1990年より当科にて治療を行った胆道閉鎖症は9例で、8例を当科で手術を行い、他の1例は8歳時に肝不全状態で紹介されその後治療を継続している。当科で手術を行った8例中2例が総胆管閉塞例であったが、術後胆管炎とともに失った。他の6例は肝門部閉塞型で、全例肝門部空腸吻合を行い当初は駿河Ⅱ法で再建していたが最近ではⅠ法にて行い、順調な経過が得られている。現時点で減黄例は5例(62.5%)。本疾患治療にあたって新しく試みた治療法を紹介するとともに、我々の反省点のべ、当科における胆道閉鎖症の治療経験を報告する。

10) 周産期に発症した鼠径部静脈瘤の一例

末広 敬祐・神田 達夫
佐々木正貴・鈴木 力 (新潟大学第一外科)
畠山 勝義 (同 産科)
関塚 直人・渋谷 伸一 (同 産科)

鼠径部静脈瘤は比較的にまれな疾患であり、術前診断は困難なことが多い。鼠径部静脈瘤の一例を経験したので報告する。

症例は33歳の女性。妊娠8か月後半に母指頭大の左鼠径部の膨隆及び圧痛を自覚。産後(正常経産分娩)2日目に膨隆は鶏卵大の硬結となり、圧痛も著明となった。鼠径ヘルニアの嵌頓と診断され、同日、緊急手術施行。

ヘルニアはなく、硬結は円靭帯の血栓性静脈瘤であり、鼠径管内及び大腿部の静脈瘤を切除した。

鼠径・大腿ヘルニア嵌頓を疑った場合、妊娠及び産褥期間中では、鑑別診断として円靭帯の静脈瘤も念頭に入れておく必要がある。

11) 盲腸癌術後二日目に発症した肺動脈血栓塞栓症の一例

齋藤 義之・田邊 匡彰 (秋田組合総合病院)
中川 悟・大川 彰 (外科)
遠藤 和彦 (同 循環器科)
金澤 明彦 (同 循環器科)

肺動脈血栓塞栓症(PTE)は突然発症し時に致命的となり得る術後合併症の一つである。症例は73歳女性。循環器疾患の既往なし。盲腸癌にて全身麻酔下に回首部切除術を施行したが、術後二日目に血圧低下と嘔吐・呼吸困難で発症した。発症後早期に肺血流シンチグラフィ・肺動脈造影からPTEと診断し、ウロキナーゼによる血栓溶解療法とヘパリン・ワーファリンによる抗凝固療法を施行した。低酸素血症や循環動態に改善傾向が認められ、治療後の経過は良好であった。このような症例の救命率向上のためには発症後早期の迅速かつ的確な診断と治療が重要である。

12) 骨盤原発軟骨肉腫術後の11年目に多発性肺転移を肺部分切除した1症例

平原 浩幸・相馬 孝博 (長岡中央総合病院)
(胸部外科)

症例は71歳、女性で1987年6月左骨盤の軟骨肉腫の診断で他院にて広範切除術を施行された。1997年3月24日意識障害となり、脳腫瘍内出血で、腫瘍切除術施行され軟骨肉腫の脳転移と診断された。このとき多発性肺転移を指摘され、1997年10月13日の胸部CTにて肺転移巣の急激な増大を認めたため、1998年1月21日胸骨正中切開により両側肺部分切除を行い7個の腫瘍を切除した。組織は骨盤、脳転移、肺転移いずれも同様にmyxoid chondrosarcomaの像を示し、核分裂像をわずかに認め、辺縁に細胞成分の増加を認めEvansの病理分類のⅡ度であった。軟骨肉腫は原発巣が完全切除されれば長期生存が望めるが、遠隔転移が予後を不良にする要因である。組織学的に低悪性度の場合は遠隔転移の制御により長期生存が期待できる。